

うつ病で苦しんでいる人からの相談を多く受けてきた。その中で「うつ病は遺伝するんですか」という質問も珍しくなかった。質問者に理由を聞くと「親もうつ病でした」という答えが返ってくる。この関連性について、医学的に遺伝説を裏付ける説明はない。ただ、多くの精神科医の見解をまとめると、「親の性格や行動パターンのクセをいつのまにか子供たちも真似するようになるからではないか」となる。

「うつ病」や「依存症」は親の思考などが影響か

うつ病は脳の病気だが、他の精神疾患と違って、思考の病いという要素がある。その思考パターンを形成するひとつの要素が、幼児期から成長期にかけて接してきた親の言動のクセ、と言われている。親のうつ病の原因の背景に、言動のクセ、適切でない思考（ものごとに対する受け止め方）があるとすれば、その親を見つけていた子どもがうつ病になる可能性がかかえた、という仮説につながる。依存症はどうだろう。賭け事が好きだった親の子どもが、成人に

パチンコ依存

第10回

新 相談現場からの報告

柏木 勇一

産業カウンセラー・家族相談士

居酒屋引き継ぎ繁盛したが夫との溝ができた寂しさに

なって同じような行動をする事例にも接してきた。「やっぱりあのお父さんの子だね」と、周囲ではよく言われる。これも、病気が遺伝するという専門的説明ではなく、親のふだんの行動を見続けていくうちに同じようなパターンになる、という事例かもしれない。

パチンコをストレス解消のひとつとして、ほどほどに楽しんでいた若者の姿を見ていて、自分も時には憂さ晴らしをしたいと通いはじめていくうちに、どんどん泥沼に入り込んでしまった今回のケースも、原因と結果のつながりでは共通点があるのだろう。人生の後半を台無しにしてしまった、中年女性の悲劇は、切なさすぎる展開だった。

夫は泊まり込みが多く 明るい人柄を見込まれ

郊外の駅前通りから少し小路にはいったところに赤ちょうちんの居酒屋が4、5軒並んでいる。そのうちの1軒。50代のM子さんは、カウンター席8人、数人でいっぱいになる小上がりのついた小さな居酒屋の常連客だった。夫は工務店勤務の職人。子どもはいない。

酒好きで話好き。夫婦一緒に飲酒
をすることが結構あった。

酒場ではすぐ他の客と話が弾む
明るい人柄でもあった。家の近く
での仕事が減って、夫は泊まり込
みで近県に出向くことが多くなっ
た時、M子さんひとりでの居酒屋
通いが多くなった。真面目な中年
夫婦が経営する店は、客層も心配
なく、現金払いをモットーにして
いたこともあり、経営も順調だっ
た。

ある晩、すっかり親しくなった
店の夫婦から、M子さんは思いが
けない相談を受けた。遠い田舎に
住む夫の父親が病気になる、高齢
の母親一人では介護できないとい
う。自分たちもゆくゆくはのんび
り田舎暮らしを望んでいた。その
機会がいまやってきたのだから。
この店を引き継いでもらえないか、
ということだった。

自慢の品は特にないが 面倒見のよさで人気に

あなたは安心して任せられる人
だから、というお褒めの言葉に背
中を押されるように、M子さんは、
思い悩んだ末にこの居酒屋を譲り
受け、女将さんと呼ばれる商売

を始めようと決意した。店のリフ
ォーム、流し台や冷蔵庫の買い替
えに借金をしたが、賃貸料も思っ
ていたよりは高くなく、いずれ儲
かれば夫婦二人の老後の貯え作り
にもなるという目算もあった。

もちろん夫に黙っては始められ
ない。店の夫婦の事情は正しく伝
えた上で、夫婦がいずれまた戻っ
てくるだろう。それまでの間だか
ら、と、夫の了解を得るために、
ここだけは言葉を濁した。

通勤帰り、家路を急ぐ人が多い
のは変わらなかつたが、周辺の農
地がどんどん新しい住宅地に変わ
っていったこともあって、次第に
客も増えていった。隣はおでん、
その隣は焼き鳥、という他の店に
比べると、特に自慢の品があるわ
けではなかつたが、M子さんの面
倒見のいい人柄が客を呼んでいっ
た。

常連の若いBさんが お土産に豪華な果物

30代の車販売の営業職Bさんも
新しい顧客のひとりだった。子ど
もも生まれ、賃貸マンションから
戸建てに引っ越してきた。月2、3
回、多い時でも週に1回程度の来

店。いつもひとりだったが、周り
の客にさりげなく話しかけ、いつ
のまにか会話の中心になってい
るのは営業マン特有の話術のせいだ
ろう。といって商売の話を持ち出
さなかつたので、M子さんも安心
していた。

ある日、Bさんが大きな紙袋を
手に暖簾を出したばかりの時間に
入って来た。

「早いわね。どうしたの？」
「きょうは休み。このところ忙し
かつたからね。まあ売れ行きもま
ずまずだったし」

「いいわね。あなたは本当に頑張
り屋だから」
「はい、おみやげ」といってBさ
んは紙袋からちよつと豪華な果物
のセットを出した。

家庭円満のパチンコに わが身の寂しさが募り

「どうしたのよ、いったい」
「昼過ぎからパチンコで時間をつ
ぶしていたら、思いがけずに儲か
つてね」

「パチンコ？よくやるの？」
「まあ、時々はね。外回りが多く
時間は自由に使えるから。仕事が
うまくいかない時など、憂さ晴ら

しになるし。ほとんどが持ち出し
だけれど、気分転換にはいいな」
「ほどほどにしなさいよ」

「大丈夫だよ。小遣いの中でしか
やらないから。子どももいるしも
う無茶はできないからね」

多分いいパパで家庭も円満なん
だろうな、とM子さんは想像した。
もろどうにもならないことと分か
つていても、子どもに恵まれなかつたわが身の寂しさを感じた。

Bさんの「憂さ晴らしのパチン
コ」という言葉が、その後のM子
さんに思いがけない行動をさせる
ことになるのは、M子さん自身気
づいてはいなかつた。

「俺の給料でやれるだろ」 女将さんを捨てられず

女将さん商売は順調だった。
営業時間もちゃんと守り、生活の
リズムが乱れることもなかつた。
しかし、時々帰ってくる夫との間
にミゾができてきた。疲れて帰っ
てくる夫は、妻とゆっくり過ごし
たかつたが、M子さんは居酒屋を
早く閉めることができないので、
夫への対応も以前と同じようには
できなかつた。

「いつまでやるんだ。暮らしてい

けないわけではないだろう。俺の給料で」

「申し訳ないとは思っているの。でもね、任せられたんだから、約束は守らなければ…。一緒に店で飲んでもいいのよ」

「バカ言うんじゃない。女房の前で客になれるか。大体誰も来なくなるよ」

夫が数日間家にいてまた出ていった後も、イライラは消えなかった。夫への不満というよりは、平穩だった夫婦二人の生活にミゾを作ってしまったかもしれない自分へのやるせない感情だった。店をやめようかとも考えた。しかし、すぐにこの「女将さん」の経験は捨てられないという気持ちの方が強くなった。

「気分転換にはいいよ」に「連れてって欲しくない」と

店では明るく振る舞いながら、ひとりになると沈みがちになっていった。このむしゃくしゃした気分をなんとか落ち着かせたい。そう思った時、「気分転換にはいいよ、パチンコは」というBさんの言葉を思い出していた。もちろんやったことではない。店の中に入ったこ

ともない。気分転換ができるなら…と、すっかりパチンコが頭から離れなくなっていた。

Bさんが来店したある晩、こっそり話しかけた。「こんど、あなたが休みの日の昼に私をパチンコに連れてって欲しくないかしら」。もちろんBさんはびびくりした。

「どうしたんですか、急に」

「特に理由はないけれど。ここに来るお客さんの中には、あなた以外にもパチンコをやっている人はいらっしゃるの。同じ話題を作るためにも、ちょっとのぞいてみたいから。いいでしょうか?」

「そういうことか。さすがは女将



さんだね。そこまで商売のことを考えるなんて。それに、昼の時間帯は結構女性の客がいるんですよ。年齢層もばらばらで。いいですよ。ええと、次に休める日は…」

「昼の侘しき埋めたいと一人で行き回数も増え

交渉成立。M子さんが初めてパチンコ店に入ったのはそれから数日後のことだった。手取り足取りというわけではなかったが、一円パチンコのコーナーで、Bさんの隣の台で教えられながら始めた。スピードは遅いが、難しいことではなかった。

その時は30分ほど楽しみ店を出た。出費は予想よりは少なかった。店の雰囲気は悪くないと感じた。音楽とパチンコ玉がはじける音がうるさかったが、その騒音の中で、ひとりになれる空間があることを知った。

仕込みなど、開店前の準備を早めに済ませて、M子さんがひとりでパチンコ店に入るまでに時間はかからなかった。店の経営自体は自分の性格に合っているの、客を相手にしている夜の時間には満足していた。しかし、たったひと

りになる昼の何とも言えないわびしさは次第に膨らんでいった。心にぽっかりと空いた穴にふたをするためのパチンコに興味が増していった。一回30分と決め、用意した資金が無くなれば、30分にはこだわらない、と最初の内は心に誓った通りの行動だった。週一回というペースも守るつもりだったが、二回になることもあった。

「隣の店でバカ当たり開店時間が過ぎてても…」

店を引き継いで以来、夫が帰る日も遠のいていった。女性と付き合うような裁量はない夫と違って、う投げやりな感情さえ浮かんでいった。通い始めたM子さんは、ある不安を感じた。この町と同じパチンコ店だけではまずくないか、これまで一度もなかったが、店の客と顔を合わせたら、お互い気まぐしくなるだろう…。ほとんどは夫が使っていたマイカーで隣のパチンコ店に出かけ始めた。パチンコ、スロットなどの遊技機器類は同じだし、店の構造にも大きな変化はないが、客層や店の雰囲気は違っ

ていた。

気分転換、憂さ晴らしという目的を捨てたわけではなかったが、行動範囲が広がったことで、通う店も多くなった。次第に腕も上がり、5回に一回は、高額ではないが、儲けることもあった。

隣の規模の大きい店でパチンコに興じていたある日、台に恵まれたのか、とどまることがない、という表現がびったりするほど出玉が多かった。つい、時間のたつのも忘れてのめりこんだ。何もかも忘れる感覚に酔った。気がついたら夕方六時を過ぎていた。すぐ帰れば用事があつて開店が遅くなった、と言いつくことができる時間だったが、M子さんは金縛りにあつたように身体が固まり、そのまま台から離れることができなかった。そして初めて店を休んだ。

夫と別れ店もたたんだ Bさんが心配して電話

一度休むと、休むことへの罪悪感も薄れ、店を閉める日が増えていった。状況から、パチンコにのめりこんだと語ることは簡単だが、「夫との幸せな生活が崩れてしまった」「自分は本当に引き受けて



よかつたのか」「もう戻れない

「なるようにしかならない」という葛藤をだれにも打ち明けることができないまま、唯一の逃げ場所としてパチンコに向かった。パチンコに行かない日はじつと家にもつていた。貸主からは家賃を催促する手紙が届いたが返事は出さなかった。開けたり休んだりの日々が一年近く続いた後、店の赤ちょうちんが灯る日はなかった。

かつての常連客は両隣の店に移つていった。当然M子さんのことが話題になる。双方の店の経営者とも「パチンコ屋で見かけたという噂は聞こえてくるけど、まさかね」と語るのを、偶然Bさんが耳にした。ショックだった。一緒にパチンコに行つたのは一回だけ。Bさんもまた、「まさか」という思いだけがかけめぐつた。つながらるかどうか、BさんはM子さんの携帯電話に連絡した。数回は応答がなかったが、ある晩、「申し訳ない。悪いのは自分。夫

とも別れた。もうこの土地にも住めない」と涙声で語ってきた。そして「残つた家賃は分割して払います。店の後の処理も大家さんに頼んだら了解してもらいました」ともつけ加えた。

2か月後に話を聞けた 普通に生活の様子だが

自分にはどうしようもないこととは思つても、このまま黙つては行かない、とBさんは考えた。心の隅に、申し訳ないという気持ちもあつた。会つて話をしたい、と何度か電話をしたがしばらく応答はなかった。二か月後、M子さんの方から電話があつた。「少し落ち着いたから会いたい。会つてお詫びしたい」と話してきた。いつでも驚かせる人だな、と思いつつ、Bさんも会うことを受け入れた。

M子さんが都合がいいという平日の午後、近隣の町の外食店で会つた。どこに住んで何をしているかは聞かなかつた。服装や表情からは普通の生活ができていることが伝わってきた。ポツリポツリ話すパチンコにはまっていたいきさつをただ聴き続けた。

Bさんから「何とかありませんか」と相談を受けたが、正直、もう第三者が出る段階ではなかった。何も浮かびません、と答えながらも、ここに至つた経緯を聞いた。パチンコ店には女性客も多い。M子さんのようなケースは極めてまれで、楽しみの時間としてくつろいでいる人が多いのだろう。実際、M子さんも最初はそうだった。

M子さんは、自分で作った泥沼からはい上がり、苦しいことは分かつて、また新たな道を歩んでいくために、誰かに自分をさらけ出し、清算したかつたのだろう。Bさんがその相手になった。十分に聞いてあげて、それで良かったんじゃないでしょうか、と語りながらBさんと別れた。

柏木勇一(かしわぎ ゆういち)

大学卒業後、会社勤務を経て、現在はEAP企業(Employee Assistance Program)でカウンセラー及び研修講師として活動。厚労省認定産業カウンセラー、キャリア・コンサルタント、家族相談士、交流分析士